

Visual COBOL チュートリアル

Eclipse – JVM COBOL プログラムの単体テスト

1 目的

本チュートリアルでは、JVM COBOL プログラムに対するテスト作成、実行方法、および、テスト結果を表示させる方法の習得を目的としています。

Visual COBOL 製品に付属している MFUnit は、xUnit 系の単体テストフレームワークです。xUnit はオブジェクト指向型の単体テストフレームワーク SUnit に起源を持つ JUnit や RUnit 等の単体テストフレームワークの総称です。

MFUnit は xUnit の設計アーキテクチャーや仕組みは取り入れつつも COBOL 開発者にとって扱いやすい手続き型の COBOL を対象とした単体テストフレームワークという設計思想の下、開発されました。

MFUnit は COBOL 開発作業に以下の利点を提供します。

- テストを繰り返し実行させることができるため、修正作業時などのテスト工数の削減が見込める
- Jenkins などの継続的インテグレーション (Continuous Integration) ツールと連携によりテストの自動化が行え、DevOps サイクルの導入が足がかりを作れる

MFUnit は JVM COBOL に対するテストを記述することもできますが、JVM COBOL は 他の Java 言語と同様、Java バイトコードを生成します。このため、Java プログラムのように JUnit 単体テストフレームワークを使用することで、より統一性のあるテスト運用が可能です。本チュートリアルでは、JUnit 単体テストフレームワークを利用したテスト実装方法を学びます。

2 前提

- 本チュートリアルで使用したマシン OS : Windows 11
- Visual COBOL 11.0 Patch Update 01 for Eclipse がインストール済みであること

本資料は、JVM COBOL に対する単体テストフレームワークの利用方法を記載したチュートリアルです。ネイティブ COBOL の単体テスト実現方法については、別チュートリアルを参照ください。

下記のリンクから事前にチュートリアル用のサンプルファイルをダウンロードして、任意のフォルダーに解凍しておいてください。

[サンプルプログラムのダウンロード](#)

内容

- 1 目的
- 2 前提
- 3 チュートリアル手順
 - 3.1 IDE からの実行
 - 3.1.1 Eclipse の起動
 - 3.1.2 チュートリアルプロジェクトの作成
 - 3.1.3 JVM COBOL プログラムの作成
 - 3.1.4 JUnit プロジェクトの作成
 - 3.1.5 JUnit テストプログラムの実行
 - 3.2 コマンドラインからの実行

3 チュートリアル手順

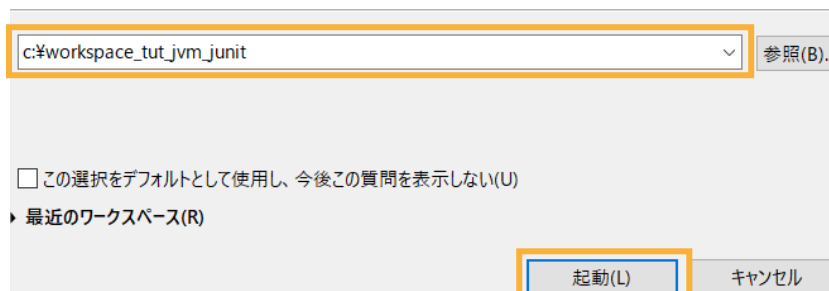
3.1 IDE からの実行

3.1.1 Eclipse の起動

- 1) スタートメニューより、[Rocket Visual COBOL] > [Visual COBOL for Eclipse] を選択します。
- 2) ワークスペースを指定し、[起動(L)] をクリックします。本書では、c:¥workspace_tut_jvm_junit を指定しています。

ディレクトリをワークスペースとして選択

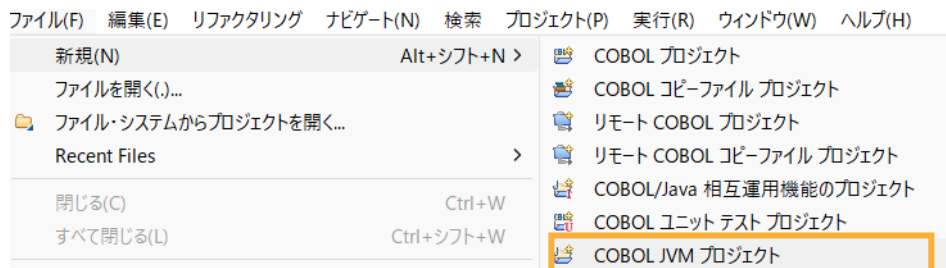
Eclipse は、ワークスペースディレクトリを使用して、環境設定と開発成果物を保存します。



起動後、ようこそ画面は閉じてください。

3.1.2 チュートリアルプロジェクトの作成

- 1) Eclipse IDE メニューより、[ファイル(F)] > [新規(N)] > [COBOL JVM プロジェクト] を選択してください。



- 2) 以下の入力を行い、[終了(F)] をクリックします。

プロジェクト名： AirportDemoJVMJUnit

JRE： 実行環境 JRE の使用

補足)

JRE については、各環境にあわせて異なる選択をして頂いても問題ありません。

COBOL JVM プロジェクト

ワークスペースまたは外部の場所に COBOL JVM プロジェクトを作成します。



プロジェクト名(P):

☒ デフォルト・ローケーションの使用(D)
 ローケーション(L): [参照\(R\)...](#)

プロジェクト テンプレートを選択

☐ テンプレートの参照 [テンプレートの設定を構成...](#)

場所: [参照...](#)

ファイルシステムを選択: default ▾

JRE

☒ 実行環境 JRE の使用(Y): ▾

☐ プロジェクト固有の JRE を使用(S): ▾

☐ Use default JRE 'AdoptOpenJDK' and workspace compiler preferences [JRE を構成...](#)

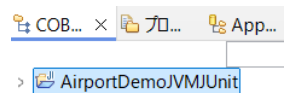
ワーキング・セット

☐ ワーキング・セットにプロジェクトを追加(I) [新規\(W\)...](#)

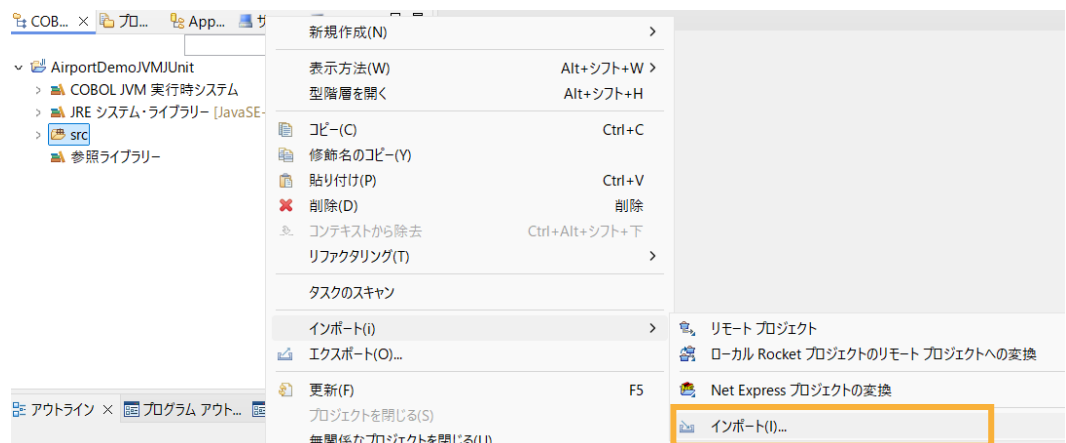
ワーキング・セット(O): [選択\(E\)...](#)

[?< 戻る\(B\) 次へ\(N\) > 終了\(F\) キャンセル](#)

プロジェクトが作成されます。



- 3) AirportDemoJVMJUnit プロジェクト配下の「src」フォルダーを選択した上で、マウスの右クリックにてコンテキストメニューを表示し、[インポート(I)] > [インポート(I)] を選択します。



- 4) [一般] > [ファイル・システム] を選択し、[次へ(N) >] をクリックします。

選択

ローカル・ファイル・システムから既存のプロジェクトリソースをインポートします。



インポート・ウィザードの選択(S) :

フィルタ入力

- ▼ 一般
 - アーカイブ・ファイル
 - ファイル・システム**
 - フォルダーまたはアーカイブ由来のプロジェクト
 - 既存プロジェクトをワークスペースへ
 - 設定
- > EJB
- > Git
- > Gradle

- 5) [参照(R)] をクリックし、サンプルファイルを展開したフォルダー内の ProjectData¥src フォルダーを選択し、src フォルダーにチェックした上で、[終了(F)] をクリックします。

ファイル・システム

ローカル・ファイル・システムからリソースをインポートします。



次のディレクトリーから(Y): C:\vc-eljvmttestframework¥ProjectData¥src

<input checked="" type="checkbox"/> src	<input checked="" type="checkbox"/> aircode.cbl <input checked="" type="checkbox"/> airparams.cpy <input checked="" type="checkbox"/> airrec.cpy
--	--

インポート先フォルダ(L): AirportDemoJVMJUnit/src

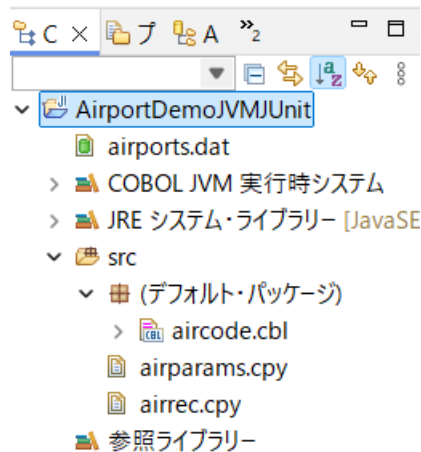
オプション

☐ 警告を出さずに既存リソースを上書き(O)
☐ トップ・レベルのフォルダーを作成(C)

COBOL エクスプローラー画面より、インポートが完了したことを確認します。

- 6) AirportDemoJVMJUnit プロジェクト配下を選択した状態で、再度、上記インポート手順を以下の方法にて実施します。
- [参照(R)] ボタンクリック後のフォルダー選択にて、サンプルファイルを展開したフォルダー内の ProjectData を選択
 - airports.dat をインポート

インポート後、以下のようになります。



3.1.3 JVM COBOL プログラムの作成

前手順でインポートした `aircode.cbl` はレガシーなネイティブ COBOL プログラムです。本手順では、`aircode.cbl` に一切の変更を加えることなく、JVM COBOL として機能するよう、Wrapper クラスを作成します。

- 1) `AirportDemoJVMUnit` プロジェクト名を選択した状態で、マウスの右クリックにてコンテキストメニューを表示し、[新規作成(N)] > [COBOL JVM クラス] を選択します。



- 2) 以下の入力を行い、[終了(F)] をクリックします。

パッケージ: "com.sample"

名前: "AircodeWrapper"

COBOL JVM クラス

COBOL JVM クラスを新規作成します。



ソース・フォルダ(D):	AirportDemoJVMUnit/src	参照(O)...
パッケージ(K):	com.sample	参照(W)...
名前(M):	AircodeWrapper	
修飾子:	<input checked="" type="radio"/> public(P) <input type="radio"/> internal(N) <input type="checkbox"/> abstract(I) <input type="checkbox"/> final(L) <input type="checkbox"/> static(C)	
スーパークラス(S):		参照(E)...
インターフェース(I):		追加(A)...
		除去(R)
<div> ? 終了(E) キャンセル </div>		

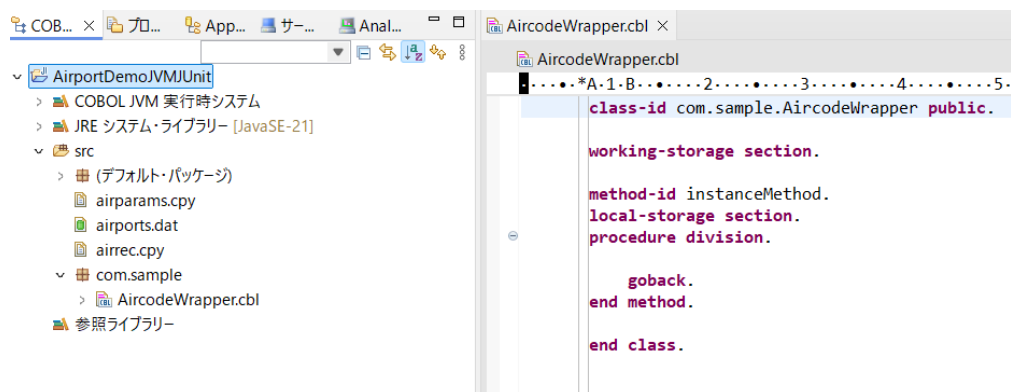
COBOL JVM クラス

COBOL JVM クラスを新規作成します。



ソース・フォルダ(D):	AirportDemoJVMUnit/src	参照(O)...
パッケージ(K):	com.sample	参照(W)...
名前(M):	AircodeWrapper	
修飾子:	<input checked="" type="radio"/> public(P) <input type="radio"/> internal(N) <input type="checkbox"/> abstract(I) <input type="checkbox"/> final(L) <input type="checkbox"/> static(C)	
スーパークラス(S):		参照(E)...
インターフェース(I):		追加(A)...
		除去(R)
<div> ? 終了(E) キャンセル </div>		

AircodeWrapper プログラムが作成されたことを確認します。また、AircodeWrapper.cbl が自動的に開かれます。

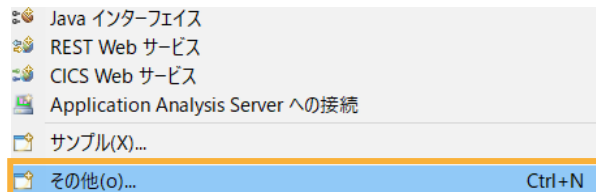


- 3) サンプルファイルを展開したフォルダー内の AircodeWrapper.cbl をメモ帳などで開き、その中身でエディター上の AircodeWrapper.cbl を上書きしたうえで、プログラムを [ファイル(F)] > [保存(S)] をクリックして上書き保存します。

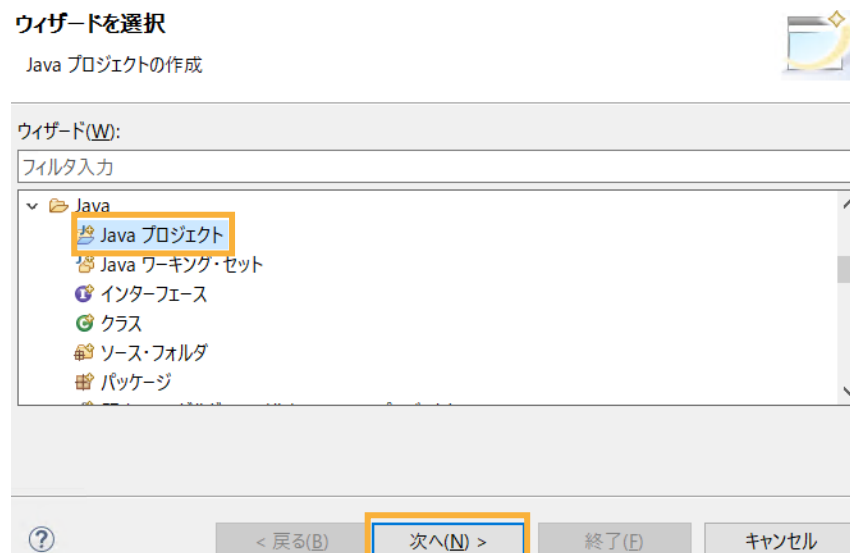
この Wrapper クラスは、com.sample.AircodeWrapper クラスとして、Java 言語から レガシーの COBOL を呼び出せるよう、各種メソッドを定義しています。

3.1.4 JUnit プロジェクトの作成

- 1) Eclipse IDE メニューより、[ファイル(F)] > [新規(N)] > [その他(o)] を選択します。



- 2) [Java] > [Java プロジェクト] を選択し、[次へ(N) >] をクリックします。



- 3) 以下の入力を行い、[終了(F)] をクリックします。

プロジェクト名 : AirportDemoJUnit
 JRE : 実行環境 JRE の使用
 module-info.java を作成 : チェックを外す

補足)

JRE については、各環境にあわせて異なる選択をして頂いても問題ありません。

Java プロジェクトの作成

Java プロジェクトをワークスペースまたは外部ロケーションに作成します。



プロジェクト名(P):

☒ デフォルト・ロケーションの使用(D)
 ロケーション(L): [参照\(R\)...](#)

JRE
☒ 実行環境 JRE の使用(U):
☐ プロジェクト固有の JRE を使用(S):
☐ Use default JRE 'AdoptOpenJDK' and workspace compiler preferences [JRE を構成...](#)

プロジェクト・レイアウト
☐ プロジェクト・フォルダをソースおよびクラス・ファイルのルートとして使用(U)
☒ ソースおよびクラス・ファイルのフォルダを個別に作成(C) [既定値を構成...](#)

ワーキング・セット
☐ ワーキング・セットにプロジェクトを追加(D) [新規\(W\)...](#)
 ワーキング・セット(Q): [選択\(E\)...](#)

モジュール
☒ module-info.java を作成(M)
 モジュール名(M):
☐ コメントの生成(G)

[?](#) [< 戻る\(B\)](#) [次へ\(N\) >](#) [終了\(F\)](#) [キャンセル](#)

以下のようなダイアログが表示された場合、[パースペクティブを開く(O)] をクリックします。

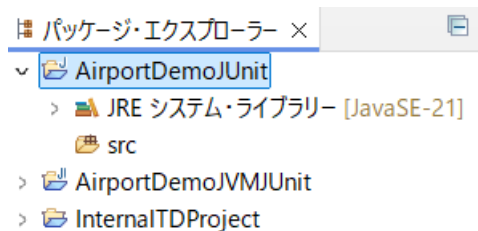
Java パースペクティブを開きますか？

このパースペクティブは、Java 開発をサポートするために設計されています。パッケージ・エクスプローラー、型階層、および Java 固有のナビゲーション・アクションを提供します。

☐ 常にこの設定を使用する(R)

[パースペクティブを開く\(O\)](#) [いいえ\(N\)](#)

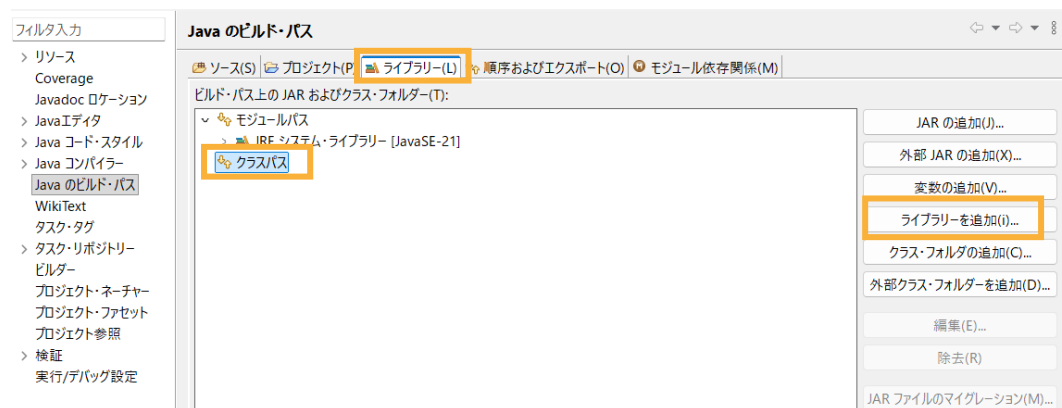
プロジェクトが作成されます。



- 4) AirportDemoJUnit プロジェクト名を選択した状態で、マウスの右クリックにてコンテキストメニューを表示し、[ビルド・パス(B)] > [ビルド・パスの構成(C)] を選択します。



- 5) 「ライブラリー(L)」タブを選択し、[クラスパス] を選択したうえで [ライブラリーを追加(i)] をクリックします。



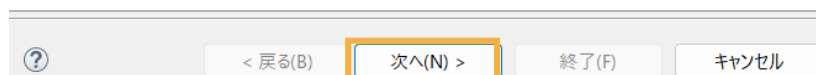
- 6) 「JUnit」を選択し、[次へ(N) >] をクリックします。

ライブラリーの追加

追加するライブラリー・タイプを選択します。



COBOL JVM 実行時システム
CXF ランタイム
EAR ライブラリー
JRE システム・ライブラリー
JUnit
Maven Managed Dependencies
Web App ライブラリー
サーバー・ランタイム
プラグインの依存関係
ユーザー・ライブラリー
接続可能性ドライバー定義



- 7) そのまま、[終了(F)] をクリックします。

JUnit ライブラリー

このプロジェクトで使用する JUnit バージョンを選択してください。



JUnit ライブラリーバージョン(J): JUnit 5

現在のロケーション: junit-jupiter-api_5.10.2.jar -C:%Users%Public%Rocket Software%Visual COBOL%eclipse%plugins

ソース・ロケーション: junit-jupiter-api.source_5.10.2.jar -C:%Users%Public%Rocket Software %Visual COBOL%eclipse%plugins

- 8) 「プロジェクト(P)」タブを選択し、[クラスパス] を選択したうえで [追加(D)] をクリックします。

Java のビルド・パス

ビルド・パス上に必要なプロジェクト(R):

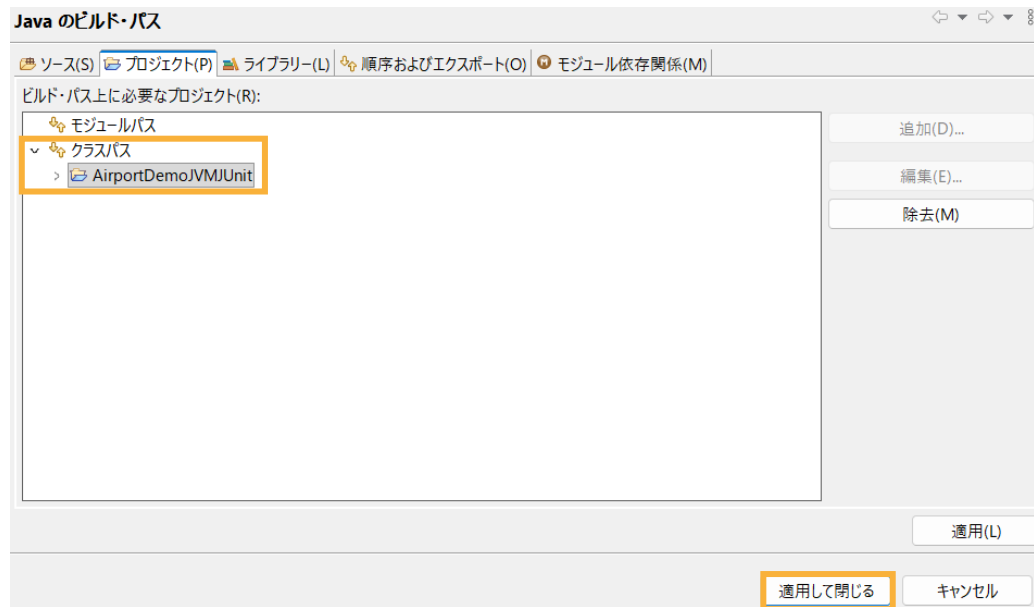
☒ クラスパス

- 9) AirportDemoJVMJUnit プロジェクトにチェックを行い、[OK] をクリックします。

追加するプロジェクトを選択してください:

☒ AirportDemoJVMJUnit

10) AirportDemoJVMJUnit プロジェクトが追加されたことを確認し、[適用して閉じる] をクリックします。



11) AirportDemoJUnit プロジェクト配下の src フォルダを選択した状態で、マウスの右クリックにてコンテキストメニューを表示し、[新規(W)] > [クラス] を選択します。



12) 以下の入力を行い、[終了(F)] をクリックします。

パッケージ: com.sample

名前: AircodeWrapperTest

Java クラス

新規 Java クラスを作成します。



ソース・フォルダ(D): 参照(o)...

パッケージ(K): 参照(W)...

☐ エンクロージング型(Y): 参照(W)...

名前(M):

修飾子: ☒ public(P) ☐ package(C) ☐ private(V) ☐ protected(T)
☐ abstract(T) ☐ final(L) ☐ static(C)
☒ none ☐ sealed ☐ non-sealed ☐ final(L)

スーパークラス(S): 参照(E)...

インターフェイス(i): 追加(A)...

除去(R)

作成するメソッド・スタブの選択

☐ public static void main(String[] args)(V)

☐ スーパークラスからのコンストラクター(C)

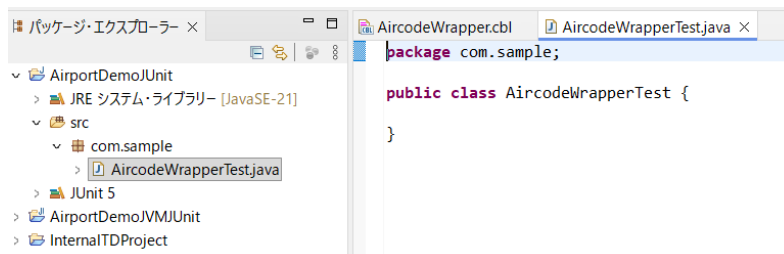
☒ 継承された抽象メソッド(H)

コメントを追加しますか? (テンプレートの構成およびデフォルト値については[ここ](#)を参照)

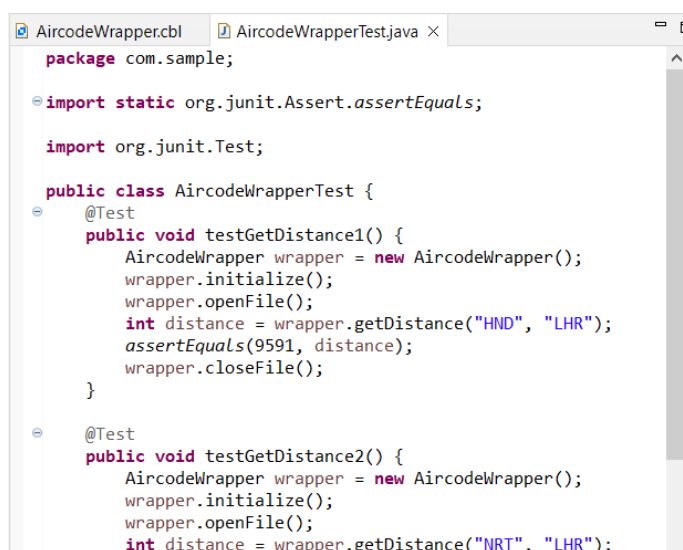
☐ コメントの生成(G)

終了(F) キャンセル

AircodeWrapperTest.java が作成されます。



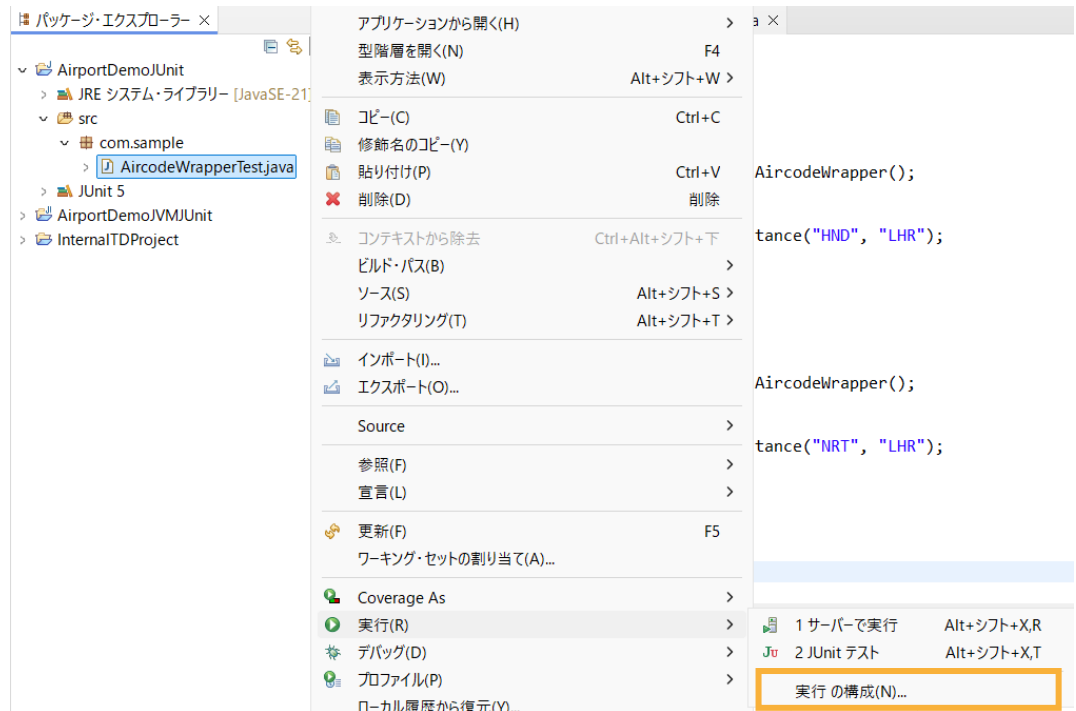
13) サンプルファイルを展開したフォルダー内の AircodeWrapperTest.java でコードを上書き保存します。



一般的な JUnit テストが記述されており、そのテストプログラム内で、さきほど作成した AircodeWrapper クラスが通常の Java クラスとして利用されていることが分かります。このように、JVM COBOL を利用することで、COBOL を意識させることなく、Java プログラム内で利用することができます。

3.1.5 JUnit テストプログラムの実行

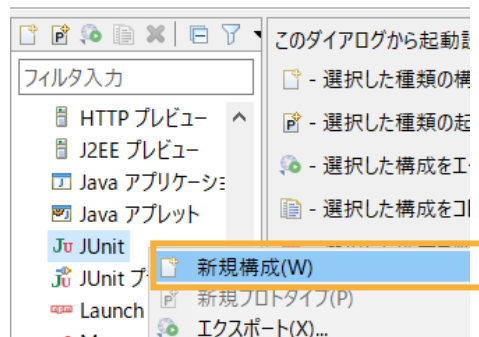
- 1) AirportDemoJUnit プロジェクトの配下の AircodeWrapperTest.java を選択した状態で、マウスの右クリックにてコンテキストメニューを表示し、[実行(R)] > [実行の構成(N)] をクリックします。



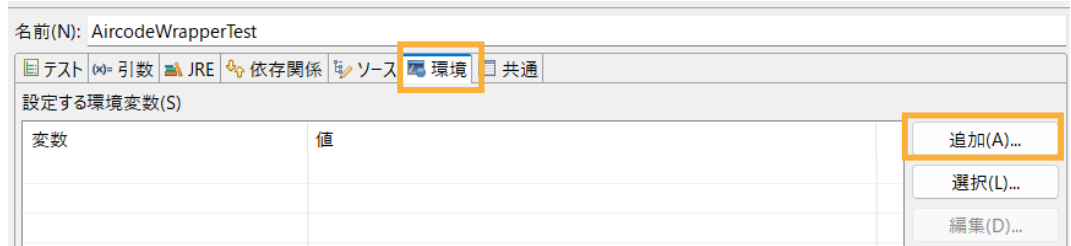
- 2) 画面左側より「JUnit」を選択した状態で、マウスの右クリックにてコンテキストメニューを表示し、[新規構成(W)] を選択します。

構成の作成、管理、および実行

JUnit テストを起動する構成を作成します。



- 3) 「環境」タブを選択し、[追加(A)] をクリックします。



名前(N): AircodeWrapperTest

テスト 引数 JRE 依存関係 ソース **環境** 共通

設定する環境変数(S)

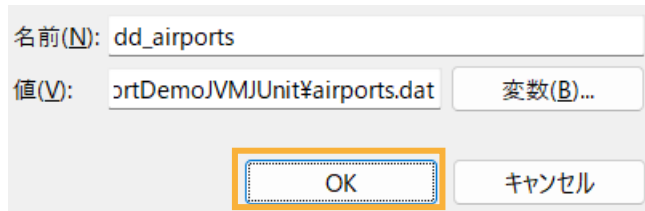
変数	値

追加(A)...
選択(L)...
編集(D)...

- 4) 以下の入力を行い、[OK] をクリックします。

名前: "dd_airports"

値: "..¥AirportDemoJVMJUnit¥airports.dat"

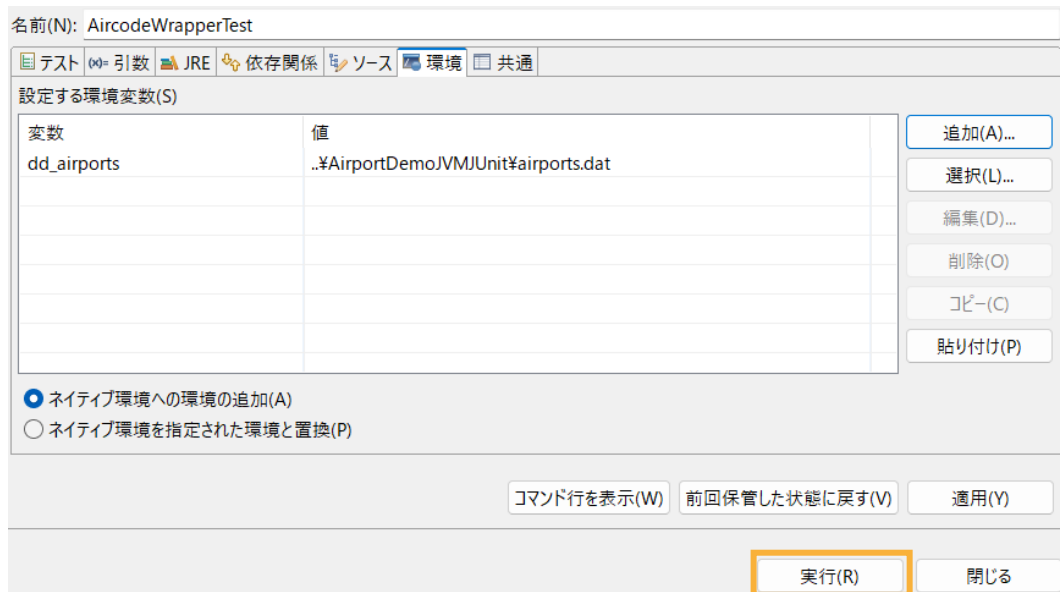


名前(N): dd_airports

値(V): ortDemoJVMJUnit¥airports.dat 変数(B)...

OK キャンセル

- 5) dd_airports 環境変数が追加されたことを確認して、[実行(R)] をクリックします。



名前(N): AircodeWrapperTest

テスト 引数 JRE 依存関係 ソース **環境** 共通

設定する環境変数(S)

変数	値
dd_airports	..¥AirportDemoJVMJUnit¥airports.dat

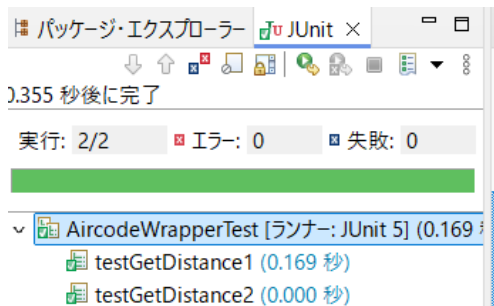
追加(A)...
選択(L)...
編集(D)...
削除(O)
コピー(C)
貼り付け(P)

☒ ネイティブ環境への環境の追加(A)
☐ ネイティブ環境を指定された環境と置換(P)

コマンド行を表示(W) 前回保管した状態に戻す(V) 適用(Y)

実行(R) 閉じる

JUnit ビューが表示され、全てのテストが成功したことを示す緑色で表示されていることを確認します。



パッケージ・エクスプローラー JUnit ×

0.355 秒後に完了

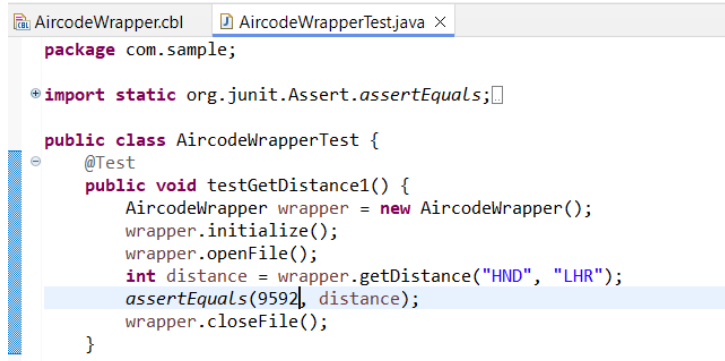
実行: 2/2 エラー: 0 失敗: 0

▼ AircodeWrapperTest [ランナー: JUnit 5] (0.169 秒)

- testGetDistance1 (0.169 秒)
- testGetDistance2 (0.000 秒)

続いて、エラーケースを確認します。

- 6) JUnit ビューより testGetDistance1 をダブルクリックし、9591 という数値を 9592 に修正した上で保存します。

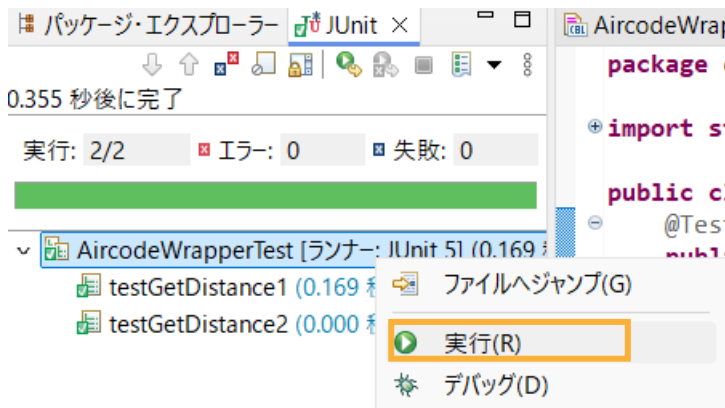


```
package com.sample;

import static org.junit.Assert.assertEquals;

public class AircodeWrapperTest {
    @Test
    public void testGetDistance1() {
        AircodeWrapper wrapper = new AircodeWrapper();
        wrapper.initialize();
        wrapper.openFile();
        int distance = wrapper.getDistance("HND", "LHR");
        assertEquals(9592, distance);
        wrapper.closeFile();
    }
}
```

- 7) JUnit ビューの「com.sample.AircodeWrapperTest」を選択した状態で、マウスの右クリックにてコンテキストメニューを表示し、[実行(R)] を選択します。



パッケージ・エクスプローラー JUnit ×

0.355 秒後に完了

実行: 2/2 エラー: 0 失敗: 0

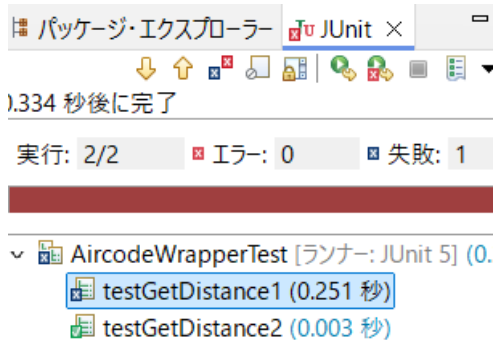
▼ AircodeWrapperTest [ランナー: JUnit 5] (0.169 秒)

- testGetDistance1 (0.169 秒)
- testGetDistance2 (0.000 秒)

実行(R)

デバッグ(D)

JUnit ビューが赤色となり、さきほど数値を修正した testGetDistance1 が失敗していることが分かります。



パッケージ・エクスプローラー JUnit ×

0.334 秒後に完了

実行: 2/2 エラー: 0 失敗: 1

▼ AircodeWrapperTest [ランナー: JUnit 5] (0.251 秒)

- testGetDistance1 (0.251 秒)
- testGetDistance2 (0.003 秒)

さきほど修正した 9592 を 9591 に再度修正し、ファイルを保存してください。

3.2 コマンドラインからの実行

JUnit テストプログラムはもちろん、JVM COBOL の開発・テストについても、コマンドラインから実施できます。従来のスタイルでのテスト作業の効率化を図ることができ、Jenkins などの CI ツールと連携する事で、テストの自動実行を行なえるため、品質担保や作業工数の削減が見込めます。

ここでは、IDE で作成したテストプログラムをコマンドラインから実行する方法について学びます。

- 1) Windows メニューより、[Rocket Visual COBOL] > [Visual COBOL Command Prompt (64-bit)] をクリックします。
- 2) サンプルファイルを解凍したフォルダー配下の command に移動します。以下では、C:¥vc-eljvmttestframework が解凍先となっています。

```
C:¥Users¥tarot¥Documents>cd ¥vc-eljvmttestframework¥command  
C:¥vc-eljvmttestframework¥command>
```

- 3) env.ini をメモ帳などで開き、以下の変数をお客様の環境に合わせて修正し、保存します。

- VC_INSTALL_PATH
Visual COBOL 製品のインストールフォルダー
- ECLIPSE_WORKSPACE
IDE で指定したワークスペースフォルダー
- ECLIPSE_PLUGIN_PATH
Visual COBOL 製品に同梱された Eclipse のインストールフォルダー

補足)

このファイルは、プログラムのビルドを行う build.bat、そして、テスト実行を行う run.bat から参照されます。それぞれのバッチファイルは、IDE 上と同じ環境を構築したうえで、ビルド、もしくはテスト実行を行います。

- 4) build.bat を実行します。

```
C:¥vc-eljvmttestframework¥command>build.bat  
Rocket (R) COBOL  
Version 11.0 (C) 1984-2025 Rocket Software, Inc. or its affiliates.  
* チェック終了：エラーはありません  
Rocket (R) COBOL  
Version 11.0 (C) 1984-2025 Rocket Software, Inc. or its affiliates.  
* チェック終了：エラーはありません  
マニフェストが追加されました  
aircode$_MF_LCTYPE_1.class を追加中です(入=823)(出=395)(52%収縮されました)  
aircode.cbldat を追加中です(入=296)(出=64)(78%収縮されました)  
aircode.class を追加中です(入=10024)(出=4443)(55%収縮されました)  
com/を追加中です(入=0)(出=0)(0%格納されました)  
com/sample/を追加中です(入=0)(出=0)(0%格納されました)  
com/sample/AircodeWrapper.class を追加中です(入=4533)(出=1893)(58%収縮されました)  
1 個のファイルを移動しました。  
C:¥vc-eljvmttestframework¥command>
```

- 5) run.bat を実行します。

```
C:\vc-eljvmttestframework\command>run.bat
JUnit version 4.13.2
.HND Tokyo Intl
    Japan                      Lat:+035.552258 Lon:+139.077969
LHR Heathrow
    United Kingdom            Lat:+051.004775 Lon:-000.461389
.NRT Narita Intl
    Japan                      Lat:+035.764722 Lon:+140.038638
LHR Heathrow
    United Kingdom            Lat:+051.004775 Lon:-000.461389
Time: 0.187
OK (2 tests)
C:\vc-eljvmttestframework\command>
```

免責事項

ここで紹介したソースコードは、機能説明のためのサンプルであり、製品の一部ではございません。ソースコードが実際に動作するか、御社業務に適合するかなどに関しまして、一切の保証はございません。ソースコード、説明、その他すべてについて、無謬性は保障されません。

ここで紹介するソースコードの一部、もしくは全部について、弊社に断りなく、御社の内部に組み込み、そのままご利用頂いても構いません。

本ソースコードの一部もしくは全部を二次的著作物に対して引用する場合、著作権法の精神に基づき、適切な扱いを行ってください。